

眠り薬に代わる本

たまらなく眠たい……。だが頭のなかには摩天楼が黒煙を吐きながら崩れていくさまが棲みついたまま消えようとしめない。

超大国アメリカを突如襲った同時多発テロ事件から四週間近く経つてもなお、NHKワシントン支局の向かいのホテルに「幽閉」されたままだった。

ようやく短い睡眠はとれるようになってきたが、深い眠りに落ちてすぐスタジオに呼び戻されることもしばしばだった。その夜も眠りに落ちて二十分、隣室のBBC特派員の電話が鳴った。緊急事態が起きている。

まどろみのなかでそう思った次の瞬間、枕元の電話が鳴った。「カブール市街に米軍が雪崩れ込んでいます。すぐに生中継をお願いします」こんな日々が続いていて

は、いくら鈍感力が取り柄の僕も神経がほきりと折れてしまう。なんとかぐっすり眠りたい。でも薬には頼りたくない。さすがに部屋の本棚を見まわし眠り薬に代わる本を探してみた。まず英語の本は除外した。悲惨な日常に引き戻されてしまうからだ。本棚の最上

デに劣らず嫌いだった。著者の芹沢が学んだフランス語も同類だろうと思っていた。迫りくる軍部のファシズムに彼らはどれほど無力だったことが。そんな戦前の知識人のありようを描いた大河小説に接することはこんな機会でもなければ永遠にないだろう。

結論を簡潔に記せば『人間の運命』はこのうえない睡眠導入剤だった。

忘れられない一冊



手嶋龍一

ちしま・りゅういち=外交ジャーナリスト、作家。著書『スギハラ・ダラ』など。

枕元に本を積み上げ、ページを開いて、主人公の世界に没入する。規則正しく七ページ半を読み進むと深い眠りに落ちていった。

段にふと視線をやると、芹沢光治良の『人間の運命』全七巻があった。「時には大河小説でも手にとってみては」と事件前に知人が東京から送ってくれたものだ。ぼくには戦前の旧制高等学校の教養主義がどうにも体質にあわない。彼らが親しんだドイツ語やドイツ哲学

わけても晦渋な訳文はムカの運命だったのだろうか。